
真・恋姫†無双『鳳徳別伝』～鳳の雛の為に凰の風は吹く～

flower

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双『鳳徳別伝』〜鳳の雛の為に鳳の風は吹く〜

【Nコード】

N8890Y

【作者名】

flower

【あらすじ】

皇甫嵩伝の方が少々詰まってしまったのでこっちを投稿して息抜きをしたいと思います（TINAMIさんでも投稿してます）

この外史を読むときの注意点

1、オリキャラは必要最低限で物語に必要な人物だけ（副将程度ならまあよし）

2、基本的には皇甫嵩伝が中心、こっちは息抜き程度で

3、皇甫嵩伝と違って正確なプロットがない上に見切り発車だからエンディングどころかどの勢力に所属するか考えてないからgdg

dになるけど不平は言わない

4、コメントするときは『あわわ』をつけること

上記の注意点を読んで「別に構わぬ」というイエス・キリストの如き清らかな心の持ち主の方はどうぞ

主人公設定

鳳徳令明（真名・凰風）

髪は黒色で瞳は真紅

背は170cm（紫苑と同じくらい）

基本的に平和主義だが守るための戦いは辞さない

荊州牧劉表の客將的な位置にいて自らが出陣する見返りに水鏡女学院への援助を求めている

数ヶ月前に孫堅が荊州に攻めてきたときに激しい一騎打ちの末に孫堅を倒した

あだ名は『鳳凰』（姓に鳳が真名に凰が入っているから）

武器・鳳雛

司馬徽が自分の財産の半分を使って作らせた名刀

鞘と柄は真紅に染められており気を込めると刀身が赤く光るとされている一品だが孫堅との一騎打ちの時にしか気を込めた事が無くその場に本人達以外はおらずその時赤く光っていたかは不明

やっぱり雛里はかわいいよね

ここは荊州襄陽郡

正確には襄陽城のある襄陽郡の中心から少し外れた山の中に建っている水鏡女学院というところだ

まだ朝早い時間だからか水鏡女学院の生徒たちは朝食の準備をしている女の子一人しか起きていない

ジューという何かの焼ける音と焦げた醤油のにおいが学院内を包んでいく

その匂いに釣られてか一人の男が目をさましフラフラと食堂へと歩いていく

「あつ、鳳風さんおはようございます」

生徒の朝ごはんを作っていた少女 朱里が男に声をかける

「ふわーああ、おはよう朱里、今日の当番は朱里だったか」

朱里に挨拶を返す男、女の子のように手入れされた黒色の髪に強い意志を感じさせる赤い瞳、そして鍛えられ引き締まった体

この男は姓を鳳、名を徳、字を令明、真名を鳳風と言い、魔女っ娘軍師雛里ンこと鳳統士元の兄である

本来男である凰風が女の子専門校学校の水鏡女学院に居るのは疑問を呈するところだが鳳兄妹は水鏡女学院の教師である司馬徽に塾を開校する前に拾われているので成り行きとしか言いようがない

「一週間前に凰風さんに作っていたいただいたお粥を作るうとしたのですが凰風さんみたいには上手くいきませんね」

朱里はお粥の入っている鍋をかき混ぜながら凰風に話しかける

「そうか？お粥ぐらいだったら簡単に作れると思うけど」

凰風は腰を横に捻りながら答える

その間にも続々と他の生徒たちが起きてきて食堂に集まってくる

「・・・よしこれで完成…凰風さんどうぞ」

朱里がお粥の入った茶碗を凰風の前に出す

「ん、ありがとう…ではさっそく・・・」

凰風は茶碗を持つと大根の漬物と一緒に食べていく

「・・・うん、漬物や肉との相性を考えて薄めに味付けをしたりしていて美味しいと思うよ」

凰風は茶碗を置くと朱里に感想を述べる

「あ、ありがとうございます」

朱里は褒められてよほど嬉しいのか頬を少し染めて礼を言う

「…ただ一つ言うなら水が少し多かったかな」

「そうですね、善処します」

補足説明をすれば鳳風の料理の腕は水鏡女学院の中でも随一のもので荊州でも彼に勝てる者はそういない

実際に二ヶ月前の料理大会では洛陽の料亭から来たという料理人との対決で審査委員はおるか観客まで全員鳳風の札を挙げるといふ珍事件があったほどだ

「…グス…お兄ちゃんどこ…グス…」

そこに一人の少女が現れる

うさぎのパジャマを着て片手にくまのぬいぐるみを持って現れた少女は鳳風を見つけると走って鳳風の元へと駆け寄り泣きじゃくり始めた

「…ふええーん……お兄ちゃん……」

「どうした？雛里、怖い夢でもみたか」

いま凰風が言った通りこの少女は凰風の妹鳳統土元である

凰風は雛里を抱きかかえるとあやし始める

「…グス……おつきなくまさんが夢に出てきて…グス……朝起きたらお兄ちゃんが……いなくて……くまさんに食べられちゃった…と思っ」

雛里はところどころしゃくりあげながら夢の話をする

「大丈夫だぞ、雛里俺はここにいるからな」

凰風は雛里の頭を撫でながら抱きしめる力を強くしていく

暫くそうしているとやがて雛里の泣く声も収まっていき

「えへへ、お兄ちゃん？」

凰風に甘え始める

雛里の年から考えてこのように兄に甘えてくるのは少々おかしいのだがこれには特別な事情がある

雛里にはその内気な性格も関係してあまり友達と呼べるものがない

朱里とも雛里が朱里とぶつかってしまったときに恥ずかしくて謝ら

「雛里ッ」

鳳風が雛里に怒鳴る

雛里は一瞬ビクツとなるとうつむいて黙っていた

雛里の中ではこんな式ができていた

お兄ちゃんに怒られた

お兄ちゃんが怒るようなことを言った

お兄ちゃんが嫌いなことをした

お兄ちゃんに嫌われる

・・・グスッ

「・・・ふえーん」

先程よりも大きな声で泣き始める雛里

鳳風は強く言い過ぎたことに気づき、さきほどのようにあやし始め
雛里は泣き止むとまた甘え始めるといふ永久ループに陥るのであった

孫堅 + が散りました

楼船（当時の最大規模の戦艦）の上に一組の男女…いや二匹の獣が立っていた

二匹の獣は各々の武器を構えお互いに向かって走り出す

武器がぶつかりあう刹那

凰風は片膝をつき腹部から流れる血を押さえていた

孫堅は無傷だが呼吸が荒く肩で息をしていた

「…はあはあ…これでわかっただろう……はあ…お前じゃアタシには…勝てないって事が……諦めて…アタシの軍門に降りな」

孫堅は彼女の武器『南海霸王』を雄の獣に向けながら降伏しろと最終通告を告げる

“これを拒否すれば命はない”

そんな意味を含めて

「…ふざけるなよ…ゲホッ……はあ…今まで散々自分の……兵を犠牲にして…それで善人でも…気取るつもりか…はあ…ゲホゲホ」

傷が深いのか凰風は血を吐く

「…兵を犠牲にした……そうだろうね……はあ…だがアタシは後悔

してないよ……これからの孫呉のための……必要な犠牲だったんだ」

孫堅がそう答えた時……雄の獣の体が少し跳ねた

「必要な犠牲だと……ふざけるなよ」

鳳凰は血を吐きながらも刀を支えにして立ち上がる

「人の上に立つ者が私欲のために民を犠牲にして何が国だ……何が孫呉だ。……そんなモン俺がぶっ壊してやるよ」

鳳雛が赤く光っていく

「……いいだろう、アタシ達の理想をぶっ壊すっていうなら容赦はしないよ……我が名は孫文台、『江東の虎』の牙の鋭さ味あわせてやるよ」

孫堅が『南海霸王』を構える

「……我は『鳳凰』鳳令明なり……我に敵する者よ、自らの罪と共に燃え散るがいい」

鳳凰は刀を鞘に戻し居合の構えをとる

二匹の獣は本能の部分で次の一撃で勝負が決まることを感じていた

孫堅は体勢を低くし、『南海霸王』に気を込めた。ただ鳳風を見つめ続ける。その瞳はまさに獲物を狙う虎だった。

鳳風もまた自分が使える最大限の量の気を鳳雛に注いでいく。

鳳風が気を注いでいくたびに鳳雛は赤く光っていき、やがてその光は鞘から溢れ出し周りを照らしていく。

「いざ勝負」

二匹の獣は相手に向けて最高の一撃を繰り出す。

「・・・夢か」

数ヶ月前に攻めてきた孫堅軍との攻防

17歳の時に海賊団をたつた一人で壊滅させた孫堅の率いる軍は流石に強かった

陸路から黄蓋・程普・韓当・祖茂ら主力を出陣させ江夏郡の守将黄祖を引きつけ水路から孫堅自身が数百の兵と共に直接江夏に攻めるという予想すらできなかつた奇抜な戦術

俺がそれに気付けたのは奇跡だった

黄祖救援の為の兵を連れて江夏に行ったときにたまたま長江の警備をしていた兵が孫堅軍来襲を知らせてきた

あの時に知らされなければ今頃荊州は孫家が収めていたかもしれない結果だけいえば江夏は守ることに成功し大将を失った孫堅軍は撤退

した

勿論此方も無傷では済まなかった

大将黄祖とその副将張虎、張允と軍師？良そして兵4000が死んだ
そして俺も全治一ヶ月の重症だった

あの時は大変だった

なにせ全身から出血していたから腕一本自由に動かすことができなかった

食事は朱里が作ってくれたからいいんだが食べるときに朱里に食べさせてもらうという屈辱を味わう羽目になった

分かるか？

『あ〜ん』だぞ、19にもなった大人が年下の女の子に『あ〜ん』されるんだぞ！？

あの時ほど消えてなくなりたいと思った時はないだろう

「…すう…お兄ちゃん…すう…」

俺の隣で寝ている雛里の頭を撫でる

「…お兄ちゃん？」

まだあどけなさの残る顔

俺は雛里の頬に軽く口づけを落とすと部屋を出る

(B G M おもちゃの兵隊の行進)

「今日の朝ご飯は炒飯と汁物です」

誰もいない厨房で一人誰かに聞かせるようにいう凰風

誰もいないので声が反射する

凰風はそれを満足そうに聞き遂げた後厨房の隅で体育座りで反省会
(一人)をし始めた

「はわわ？凰風さんどうしました」

厨房に入ってきたのは朱里

「何でもない、何でもないんだ」

そう言って朝ごはんの準備を再開する凰風

その姿はまさに小動物

この時点で四割程の生徒が夢の国に招待された

「…おいしいよ、お兄ちゃん」

「そうか、それは良かった」

凰風は雛里の頭を撫でる

雛里はそれをくすぐったそうに目を細めながら凰風に抱きつく

それを朱里が羨ましそうに見ている

そんないつもの風景

そこに・・・

「…凰風、劉表さんが呼んでいますよ」

そんないつもの風景を壊そうとする凶報が届いた

孫堅 + が散りました（後書き）

黄祖と張虎、張允、？良を殺しちゃいました、まあ別に問題ないからいいかなって思ったんで

本当は張允は黄祖の配下じゃなかったのですが居ても出番無いので

黒雛里誕生

襄陽郡襄陽城

玉座の間に入っていく凰風と雛里

「オヤジ何の用だ？」

別に鳳兄妹と劉表は血縁関係があるわけではない

彼にも二人の娘がいて年が近かったためそう呼んでもいいと
いただけ（ちなみに劉表の妻は死んでいる）

だがそれだけでも鳳兄妹の心はかなり楽になった

司馬徽が彼らの母なら、父は劉表だろう

「やれやれ久しぶりに会ったのに挨拶も無しか、ワシは素行の悪い
息子を持ったよ…雛里も久しぶりだね」

「ひっ」

雛里は凰風の後ろに隠れる

「お兄ちゃん」

雛里が涙目で凰風を見つめてくる

「よしよし…もうちょっと待ってくれ」

凰風は雛里を抱きかかえるとそのまま劉表の方を向く

「すまんな雛里はいつも通りのようだ」

「いいさ、気にするな」

「それで今回の用件は？」

「うむ隣の益州で州牧を努めていた劉焉が死んだのは知ってるな？」

「ああ老衰だっけ」

「ああその後跡継ぎ争いが起きてな。結局四男の劉璋が勝ったんだ」

「…？その何が急用なんだ」

「跡継ぎ争いに負けた次男の劉誕が荊州に侵攻してきたのよ」

扉のほうから声がかかる

「紫苑か、久しぶりだな」

凰風は振り向かずし声を掛ける

「ええ久しぶりね凰風」

ここで一つ説明すれば鳳風は雛里を抱きかかえているわけで雛里の目は紫苑の方向を向いていることになる

これがどういうことか分かる人はいるだろうか

雛里は嫌でも持つ者と持たざる者の違いを見せ付けられるのだ（何をとは言わない）

「あわわ、年増巨乳（ボソ）」

ヒュン

「紫苑いきなり矢を飛ばすって何だ、俺がなんかしたか？」

鳳風は鳳雛で飛んできた矢を払う

どうやら鳳風にも聴こえないくらい小さな声で言ったらしい

そんな小声すらも聞き取るとはまさに嫁を弄るしゅつと（グサツ）
・・返事がない、ただの屍のよう
だ

「でも跡継ぎ争いに負けた軍勢なら兵数も物資も少ないはずだろ？俺を呼ぶようなことじゃないだろ」

孫堅との戦で勇将黄祖とその配下の張虎、張允が死んだといっても荊州には『曲張比肩』と称される黄忠や鳳凰が推挙した出生・年齢ともに不明な文聘、河族上がりの蘇飛などの将が劉表に仕えておりわざわざ鳳凰が出ずとも敗残兵程度なら一蹴できる戦力を持っていた

それを知っている鳳凰だからこそ自分が呼ばれたことに対して疑問を覚える

「ワシもそう思っていたから放置していたんだが…どうやったかは知らんが長江周辺の山賊や河賊を取り込んで兵数を二万まで伸ばしたらしい」

「ふーん…で、オヤジその戦は負けるとヤバイのか」

普通なら驚くべき数字だが鳳凰は全く動じずに尋ねる

攻め込まれているのどこか他人事のように聞いている感じがする

「ああ負ければ一気に荊州に攻め込まれるだろう」

「そうか、なら協力するよ」

鳳凰は刀に触れる

彼にとって戦なんてどうでもいいものだった

だがその結果自分の愛する妹や今まで育ててくれた司馬徽らが傷つ

くなら彼は敵を殺すことを厭わない

これがもし益州に攻め込む戦であれば鳳風は拒否しただろう…いや拒否するどころか劉表を殺していたかもしれない

だが劉表にそんな野心は無かった

彼は荊州が安泰ならそれで良かった

そんな性格だからこそ鳳風は彼をオヤジと呼び彼に協力する

「敵は陸路と水路の両方から攻めてきている」

「…、孫堅の時と同じだね」

「…鳳風」

「わかってるさ紫苑…陸路は紫苑を大将に副将は伊籍殿に任せる」

劉表軍の将でもない鳳風が軍の編成を決めていく

それだけ劉表軍での鳳風的能力が高く認められていることが分かる

「ええ」

「承りました」

「水路は俺を大将、副将を蘇飛殿と文聘に任せる」

「分かりました」

「承知した」

劉誕軍二万対劉表軍1万5千

劉家同士の争いは乱世の火種となって激しく燃え上がっていく

黒雛里誕生（後書き）

今話書いてからの反省

- 1、前回武将を殺しまくったから編成に困った（文聘はともかく蘇飛とかマイナーすぎるし伊籍は文官のイメージだし）
- 2、凰風のキャラが迷走している

ばばきーん

ちびつとシリアス

「おおおお！俺が真の三国無双だ！」

「えーと……万夫不当とはそなたの事よ！」

「いやいや何やってんすか、鳳徳の旦那も文聘將軍も」

「なんか…言わないといけない気がしてな」

「しっかりしてくださいよ、敵もそろそろ来るんですから」

そう言いながら蘇飛は長江の上流の方に視線を送る

上流から来る船に翻るのは『劉』の旗

そして船から放たれる幾千の矢の束

「はー、めんどくさいなあ」

鳳風は『鳳雛』の柄を触りながら柱にもたれかかる

「鳳徳様、そのようなことは仰らないでください」

文聘 イスラム教のアバヤのように目と手以外を黒い布で隠し孫堅の武器であった『南海霸王』を身に着けている が自らの武器である『南海霸王』の刃を布で拭きながら鳳風にそう話しかける

そんなことをしている間にも矢は嵐風達に接近していく

だが嵐風も文聘もいつこうに避ける素振りを見せない

そして嵐風達に矢が降り注ぐ

矢が全て地に落ちたとき船には誰もいなかった

朝目が覚めたときに思うのは

新しい一日が始まったという希望でも、昨日が終わってしまったという後悔でもなく

いつもあるものがそこにないという虚無感だった

「お兄ちゃん・・・」

雛里は兄がくれたクマのぬいぐるみを抱きしめる

しかしいつまでもそうしている訳にもいかずぬいぐるみを置いて嵐風が飼っている犬にえさをやりに行く

その後朝食、授業とこなした雛里は自分の部屋に戻る

「お兄ちゃん、寂しいよ」

いつからこんなに兄に依存するようになったのか

多分兄が劉表軍として戦に出始めてからだと思う

いつも一緒にいた兄が、いつも一緒にいてくれた兄が

どこか遠いところに行ってしまうそうで、二度と自分の手が届かないところに行ってしまうそうで

…怖かった

彼女は頭がよかった、だから勝手に悪い方向に考えてしまう

雛里は自分の寝台の下からある本を取り出す

以前兄に襄陽へ連れてってもらったときに買った本だ

表紙には二人の男が裸で抱き合っていた

別にやましい気持ちがあったわけではない

ただ純粹に兄のことをもっと知りたかった、自分の知らない兄の姿をもっと知りたかった

雛里は表紙をめくる

最初は人物紹介からだった

驚いたことに主人公の男は凰風に似ていた

だからだろうか雛里は時を忘れて本を読む

気が付けば日は落ちていた

雛里は本をしまつと朱里の部屋に行く

凰風に何かあつた時は朱里を頼れと言われたからだ

雛里は朱里という女性が嫌いだった

自分と兄の仲を裂くとまではいかないが兄を見つめる瞳に時々異性を見る色があることに気づいていたからだ

しかし兄は朱里を好ましく思っている

恋人としてはでなく、妹としてかもしれないが・・・それでも兄には自分だけを見ていてほしかった

「朱里ちゃん、入るよ」

「はわわ、雛里ちゃん」

こころなしに朱里は慌てているようだった

怪しい

そう思ったのは鳳雛と称された軍師としての感か、兄を愛する一人の女としての感か

「朱里ちゃん、お水もらっていい」

「うん、いいよ」

許可を貰うと雛里は水差しをとると・・・

「あわわ！」

わざとこけたふりをして朱里に水をかける

「はわわ！」

朱里は驚いて立ち上がる

そしてその拍子に背中に隠していた竹筒が落ちる

しかもテンプレの如く雛里の足元に開いた状態で・・・だ

「?…劉表攻め、鳳徳受け・・・朱里ちゃん、これって」

そっとう雛里の目は暗く輝いていた

「はわわ、はわわ、はわわー！」

凰風が『鳳雛』で敵を切り刻む

「あわわ、あわわ、あわわー！」

文聘が『南海霸王』で兵を吹き飛ばす

「だから、二人とも何してんスか」

蘇飛が冷静にツッコミながら兵を首を刈っていく

「やっぱ三人で突撃するのは無茶だったかな？」

彼らは矢が降ってきたと同時に敵船へと跳躍し乗り移っていた

矢が降り注ぐまで動かなかったのは敵兵の油断を誘うため実際に敵船に乗り込んだとき凰風達に反応できた兵は居らず物言わぬ骸となっている

「だから、俺は反対だって言ったんスよ」

蘇飛が涙声で叫びながら曲刀を振るう

いくら三人が猛将であり奇襲が成功したといっても敵兵は約一万余が違いすぎた

「ちっ…蘇飛、戻って兵の指揮をしろ」

鳳風は向かってきた敵兵を切り捨てる蘇飛に指示する

「うつつす」

蘇飛が自軍の船に向かってもう一度飛ぶ

敵兵が蘇飛を止めようと道を阻むがその全てが鳳風に斬られていく

チリン…

小さく鳳風の耳に鈴の音が響く

「ッ！」

咄嗟に首のところに『鳳雛』を構える

腕に衝撃が走る

「私の一撃を防ぐとは・・・名を名乗れ」

気づけば鳳風の後ろには紫色の髪の女がいた

「…鳳令明だ、お前は？」

鳳風は『鳳雛』を構えながら名乗る

「ほお…お前が『鳳凰』か、私の名は甘寧、鈴の音は……黄泉路を誘う道しるべと思え！」

ちびつとシリアス（後書き）

書くことが何もない

甘寧は益州の出身です

跡継ぎ争いかなんかで負けて荊州に逃げました

荊州で黄祖に冷遇されました

孫権のところに逃げ込みます

一生先鋒としてこき使われます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8890y/>

真・恋姫†無双『鳳徳別伝』～鳳の雛の為に凰の風は吹く～

2011年12月18日00時47分発行